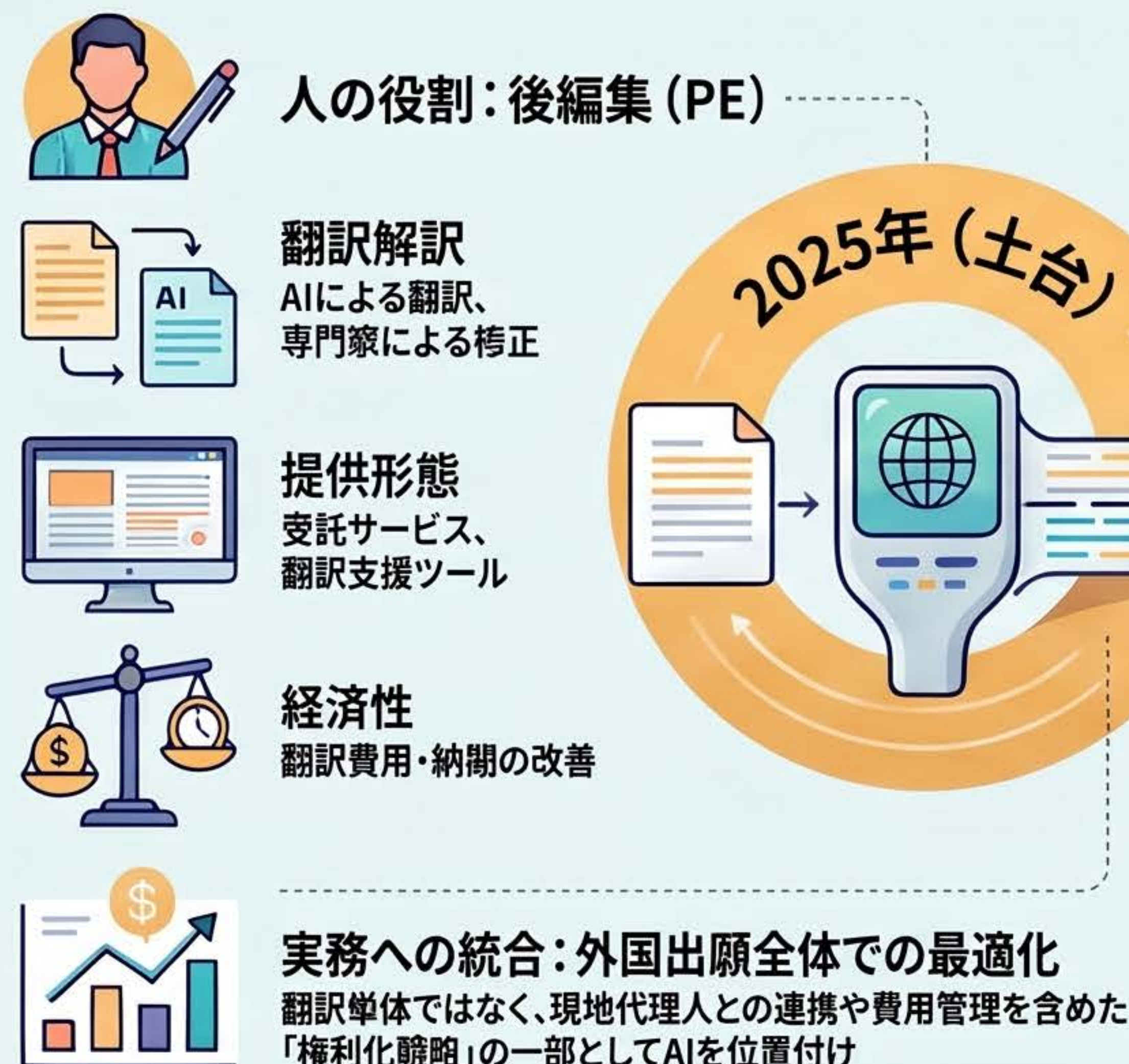


生成AI×特許翻訳の進化：2025年と2026年の比較調査

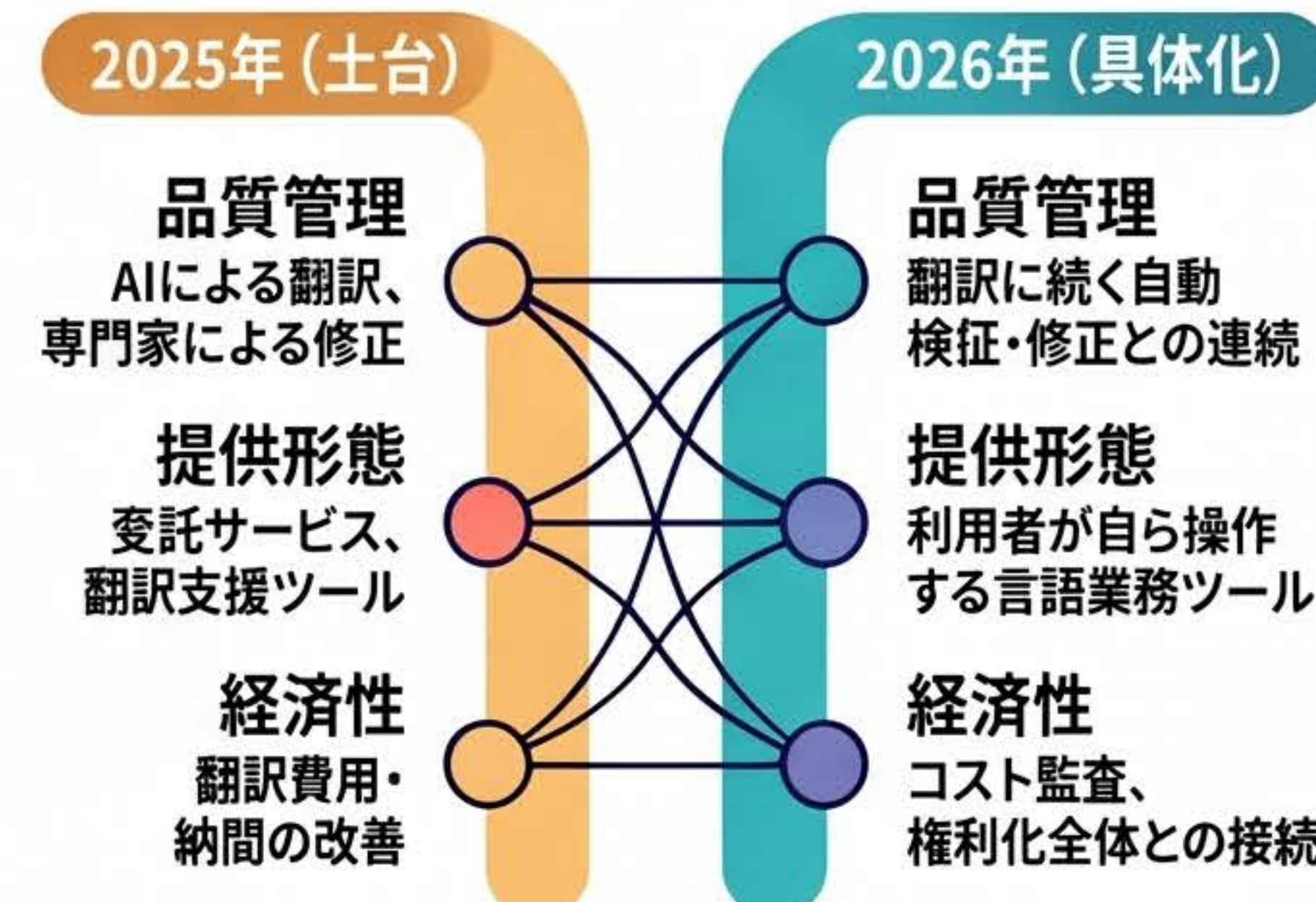
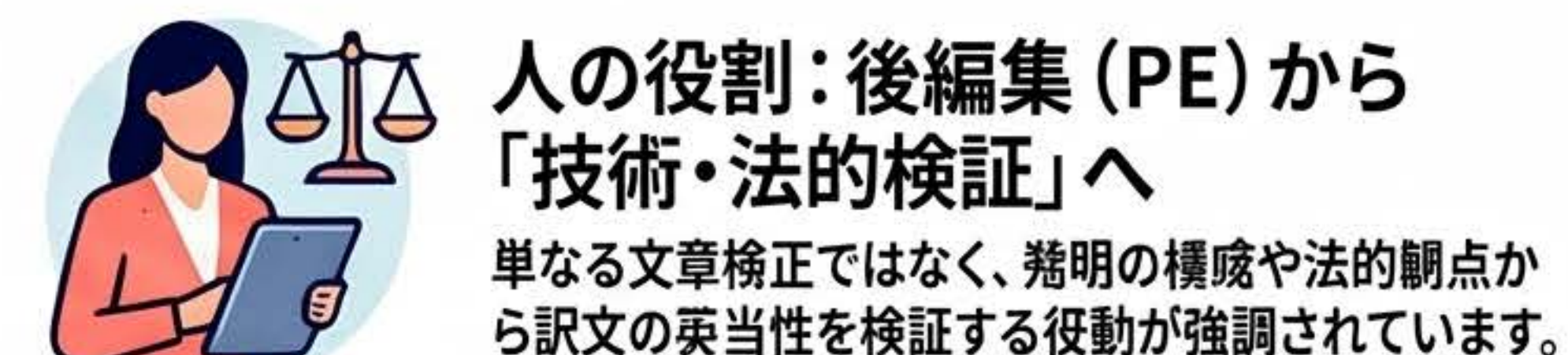
2025年から2026年へのパラダイムシフト

2025年から2026年にかけて、AI活用は翻訳精度の追求から、品質管理と業務プロセスへの統合へと進展しました。



訳文生成から「品質管理・工程連結」への拡大

2028年は、生成後の訳語チェックや自動修正までを連続した工程として提供する提案が具体化しました。



導入評価における実務的視点



用途に応じた「重視すべき評価項目」の分離



内容把握用の
「速度」



出願用の
「発明保持・専門家確認時間」
を分けて評価すべきです。



数値目標(精度・修正率)
の前提確認

「修正必要率0.05%」等の数値は、
対象文書や評価基準によって悪味
が異なるため注意が必要です。



5つの指標による
実務適応テスト

誤訳件数、チェック機能の見逃し、
人の修正時間、仕上がり、総費用
の経緯を推察。